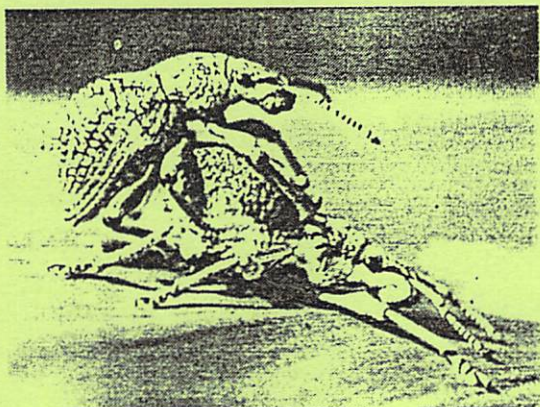


HITOTSUBATAGO NO. 10

ヒツバタゴ



10

対馬の自然と生き物の会

December 1994

レッドデータブックに見られる対馬の昆虫類

うらた あきお
浦田明夫

日本の絶滅の恐れのある野生生物について、環境庁は先に脊椎動物編をまとめたが、更に、1991年に無脊椎動物編を公表した。そのための基礎資料として、1986年より4年間環境庁によって「緊急に保護を要する動植物の種」の選定調査が実施された。この調査によって選定された昆虫類の種数は207、各目ごとの数は表に示すとおりである。

目	カテゴリー	Ex	E	V	R	Lp
コウチュウ		2	12	5	38(1)	
ガロアムシ			1			
トンボ			2(1)	1	38	
カメムシ			3	3(1)	9(1)	1
ハエ			1	1	2	
チョウ			4	4	42(4)	
ハチ				1	31	
バッタ					2(1)	
アミメガゲロウ					1(1)	
シリアゲムシ					2	
トビケラ					1	
	207(10)	2	23(1)	15(1)	166(8)	1

Ex : 絶滅種

E : 絶滅危惧種

V : 危急種

R : 希少種

Lp : 保護に留意すべき地域個体群

註 : () は対馬産昆虫類の選定種数

昆虫類のレッドデータブック記載種（亜種を含む）の数

分類のカテゴリーは、日本版レッドデータブックに記載する種を選定し、絶滅種（Ex）、絶滅危惧種（E）、危急種（V）、希少種（R）、および保護に留意すべき地域個体群（Lp）の5つに区分し、それぞれの選定種について生息状況をまとめている。

分類の段階で、昆虫類は「目」の呼称などが若干既成概念と異なるが、特に混乱はないだろう。また分類単位の取扱い方は、複数の亜種が認められている場合は亜種まで、それ以外は種を単位としている。

本報告は昆虫類以外の無脊椎動物にはふれないことにする。なお、選定種の概説は「日本の絶滅のおそれのある野生生物」（1991）無脊椎動物編によったが、若干コメントを加えた。

選定種対馬の昆虫類

○ヒヌマイトトンボ（Ex）トンボ目 イトトンボ科

1971年に水戸市校外で発見された日本固有種のイトトンボである。本州中部の太平洋岸の大河の河口部のところどころを生息地としている。しかし、つねに汚染と河岸河洲の埋立ての脅威下であり、すでに数ヶ所の産地では絶滅している。

対馬でも記録されているものの、特異な環境に生息する日本特産種だけに、その生息は危ぶまれている。

○タガメ（E）カメムシ目 コアオイムシ科

大型の水性昆虫で、体長は48～65mm、体は褐色で前脚はとくに太く、捕獲脚となる。日本では全国的に分布するが、産地は極めて局所的で個体数も少ない。水域汚染、水際環境の破壊、街灯の増加などにより、近年はとくに減っている。

対馬では30年位前に記録されて以来、その後の確認はないように思われる。

○ツシマフトギス（R）バツタ目 キリギリス科

狭い面積にしか見られない大型種として選定。対馬固有種で森林依存種である。成虫は林床に見られることもあるし、樹上に見られることもある。肉食性が強く、小型昆虫を捕らえて食す。森林と林縁草地を生息環境として保全する必要がある。

本種は林縁の草地によく見られ、特に希少種ではない。

○チョウセンケナガニイニイ（R）カメムシ目 セミ科

体長20～26mm。ニイニイゼミより丸味が強く、体表には毛が密生する。秋季（10月）に出現し、コナラ、アラカシなどの広葉樹上で生活する。日本では対馬だけに分布する。最近、樹林の伐採により、減少している。

対馬では山地に見られ、全島的にもその分布は局地的で、樹幹の高いところに静止することが多く、発見しにくい。

○ツシマカマキリモドキ（R）アミメカゲロウ目 カマキリモドキ科

生態などほとんど分かっていない。初夏に雑木林で得られ、クリの花に飛来する。対馬固有種として南方系種群の北の分布限にあたる。生息域が開発されやすい場所であり、保護が望まれる。

我々の採集の対象となる種ではないので、目立たないが、有明山の山頂には比較的多いように思われる。

○ミカドアゲハ（R）チョウ目 アゲハチョウ科

九州では全県下および対馬に分布する。幼虫の食草はオガタマノキ、タイサンボクなどである。

対馬では南部対馬で採集されるが、個体数は比較的少ない。

○クロシジミ (R) チョウ目 シジミチョウ科

年1回の発生で成虫は7～8月に出現する。本種の幼虫は初めはアリマキの分泌する甘露をなめて生活するが、3令になるとクロオオアリが幼虫をくわえて巢中に運び込み、以後幼虫はクロオオアリより給餌を受けて成長する。母蝶は産卵にあたり、アブラムシとクロオオアリの存在が必要で、特に植物は選ばない。本種の生息地は雑木林や草地であるが、その発生地が開発のため状況が変わり消滅した産地が多い。

対馬では有明山や目保呂などで記録されたが、近年生息は知られていない。本州、四国、九州に分布し、長崎県本土にも産地は知られていたが、現在は消滅したものと思われる。

○ツシマウラボシシジミ (R) チョウ目 シジミチョウ科

対馬特産種。対馬以外では台湾、マレー半島、アッサムにとび離れて分布している。多化性。成虫は5～10月に出現し、森林内の陰地を飛翔する。幼虫の食草はマメ科のヌスビトハギ、フジカンゾウなど。越冬態は終令幼虫、翌年そのまま摂食することなく蛹化、羽化する。日本固有亜種。

ツシマウラボシシジミの生息地はスギの森林である。環境の変化が大きく、伐採によりその生息地を追われ、消滅したところもあるが、また新しい生息地を求めて分布を広げているところもある。

○クロツバメシジミ (R) チョウ目 シジミチョウ科

本州、四国、九州に分布。全国的には局地的な分布を示す。多化性。成虫は5～11月に出現する。幼虫の食草は各種のベンケイソウ科植物、幼虫は食草の葉肉内や茎部に潜入する。越冬態は幼虫。

対馬は全国的にクロツバメシジミの多産地であるが、道路の改修、山地の開発、石垣の撤去、古い家屋の改築などで、近年著しく産地、個体数は減少

している。

○キンオニクワガタ (R) コウチュウ目

わが国では対馬に固有の種で、朽木中に生息していることから、その生息地として自然性の高い森林が必然的に要求される。

比較的少ない種とされていたが、原生林などで特殊な採集法によりかなりの個体数が得られている。

〔参考文献〕 環境庁 (1991) 日本の絶滅のおそれのある野生動物

—無脊椎動物編—

むしめがねNo.15 『竜良山のクロツバメシジミ』

厳原町の竜良山山頂の岩場において、クロツバメシジミを採集したので対馬における最も標高の高い産地の一つとして記録しておく。

この岩場にはベンケイソウ科の「チャボツメレンゲ」が自生しているので、これを食草にしているのは間違いないと思われる。竜良山の周囲は、原生林が残されており、わずか1 aにも満たないような山頂の岩場にどのようにして本種がたどりつけたのか不思議な気がする。

・クロツバメシジミ 1 ex. 採集 1 ex. 目撃 境 良朗

厳原町竜良山山頂 (標高558 m)

最後に、食草について御教示いただいた園分会長に感謝したい。

(境 良朗)

対馬の植物

～分布の境界線に見られる特異な植生～

こくぶ ひでとし
國分英俊

対馬の植物は、古くから多くの研究者によって全島くまなく採集が試みられ、分類、地史的なものも含めての論文も多く発表されている。このように多くの研究者が対馬の植物に注目したのは、大陸と日本との中間にあるという地理的位置に興味をもったことであろうが、日本の他地域に比べ大陸系の植物を多く産するということであろう。

対馬は全面積の約88%は山林であり、平地は少なく、山は険しい。海岸の浸蝕された断崖からは220～300 m級の山鹿そそり立ち、その斜面に海岸林が発達している。また、島内に数か所ある原始林を除いて、焼き畑農業（現在は行われていない）あるいは燃料林としての木炭、薪の生産のために、数回あるいはそれ以上代償植生である二次林が発達している。

対馬にわずかに残された原始林の植生をみるかぎり、対馬のもとの植生は、スグジイ、イスノキ、タブノキ、カゴノキを主な構成樹林とする九州本島とほとんど変わらない暖帯林だったようである。しかし、九州本島の植生と対馬の植生が大きく異なっている点は、対馬を分布の東限とする大陸系の植物が日本系の植物と混生する割合が大きいことであろう。島内では数か所、大陸系の植物と日本系の植物が混生した場所があり、天然記念物として国の指定を受けているところもある。また、日本に分布の拠点をおく植物が対馬まで分布し、大陸には分布しないものがあること、南日本系、南方系の植物の中には対馬を分布の北限とするものがあるなど、植物の分布で、大陸と日本、対馬暖流と南日本、南方系の植物の関係というように、興味あるテーマにこ

と欠かない島でもある。

対馬の植物相

対馬には木本類約300種、草本類約800種、シダ類約130種の計1200余種の植物が自生している。この中で大陸系の植物は、フシノハアワブキ、チョウセンヤマツツジ、アベマキ、チョウセンキハギ、フギレアズキナシ、ノゲルミ、コバノチョウセンエノキ、ヒトツバタゴ、コロミノサワフタギ、ゲンカイツツジ、カワムラサキツツジ、イワシデ、カラタチ、チョウセンニワフジ、ウラジロカンコノキ、ツシマヒョウタンボク、コウライヤナギ、ハイビャクシン、ヒロハコンコロカ、モクゲンジの木本20種、カラノアザミ、キバナハタザオ、チョウセンノギク、ダンギク、ダルマガク、ヒゴタイ、コウライトモエソウ、ハナナズナ、マツバニンジン、ケタガネソウ、クルマバアカネ、チョウセンイヌゴマ、ツシマママコナ、アレチアザミ、チョウセンカラスウリ、ウスギワニグチソウ、ツシマギボウシ、シロホンモンジスゲ、オオタニガワスゲ、ツシマノダケの草本20種の、計40種を産することが分かっている。この植物の中には、対馬にあって日本本土にないものも10種あり、対馬の植物相の特異さをものがたっている。

日本本土に分布の拠点をなく日本特産の植物のうち、対馬まで分布し（西限）大陸には分布しないものに、モミ、ヒメコマツ、ソヨゴ、ミヤマシキミ、コハウチワカエデ、カクレミノ、コバノミツバツツジ、カナクギノキ、ナガバノコウヤボウキの9種がある。以上あげた大陸系の植物と日本系の植物が混生している場所は対馬には数か所あるが、とくに美津島町の洲藻白岳原始林は日鮮混交林として大陸系の植物が混じる割合が大きく、大正12年に国の天然記念物に指定されている。

南日本、南方系の植物のうち、対馬を分布の北限とするものには、ヤクシマネツタイラン、アキザキナギラン、ツシマランなどがあげられる。このうちのツシマランは昭和51年に発見されたもので、今のところ日本での分布は対馬のみであり、発見された個体数も多くなく、まだ詳しい生態などはよく分かっていない。アキザキナギランについては自生していた数も少なかったと思われるが、乱獲のため絶滅状態にあることは残念でならない。

以下、対馬の植物相の一般的特徴と、大陸系の植物、日本系の植物が混生する場所を中心にして、原始林を紹介していこうと思う。

海岸に見られる植生

対馬は四方を海に囲まれて、海蝕崖がいたるところに発達しており、東側海岸、西側海岸で若干の差はあるが海拔20~30m以上で、ハマビワ、マルバグミ、ヤブツバキ、マサキを中心とした植生が見られる。林床は薄暗く、オニヤブソテツ、ノシラン、ツワブキなどの陰地性の植物が見られる。海岸に近い林縁では、ハチジョウススキ、ダルマガク、テリハノイバラ、ハマナデシコ、ホソバワダン、シャリンバイ、キジカクシなどが生えている。ハイビャクシンの群落を、上対馬町、豊玉町、美津島町の一部で見ることができる。

対馬は海岸に砂浜は少なく、ほとんどがゴロ石の浜である。ここで見られる植生は九州本島とほとんどかわることはなく、ハナゴウ、テリハノイバラ、ハチジョウススキ、ハマエンドウ、ハマウドなどが主な植物である。以前はクロマツ林が見られたが、最近の松枯れで多くが姿を消し、景観美が失われつつある。西海岸では東海岸にくらべカシワの自生が多い。

二次林

対馬には、わずかに残る原始林をのぞき、伐採した後にできた二次萌芽林が多い。この二次萌芽林を構成する樹木は、豊玉町付近を境にして北部と南部では大きく違っている。南部はスダジイを中心とした常緑広葉樹であるが、北部ではスダジイの混じる割合が極端に減り、主にコナラ、ノグルミ、アカメガシワ、リョウブ、コバノガマズミを中心とする落葉広葉樹林になる。この原因についてはよく分からない。対馬を訪ねた人は、車で島を縦断するとき、南部と北部の植生の違いに驚くことだろう。

原始林の一般的な特徴

対馬の原始林は、南の方から竜良山、神崎半島、有明山、白岳、大星山、御岳に残っているだけである。原始林を構成する主な樹木は、スダジイ、イスノキ、タブ、カゴノキであり、オガタマノキ、カクレミノ、ヤブツバキ、ユズリハなどの常緑広葉樹、ムベ、フウトウカズラ、テイカカズラなどのつる植物、林床にはアリドウシ、マンリョウ、トチバニンジン、キエビネ、ナツエビネ、シュンラン、ヤブラン、オモト、ムサシアブミなどの草本類が生えている。原始林の上部ではアカガシ林が発達し、イスノキ、ヒサカキ、リョウブが混じり、林床はミヤマシキミの群落が見られる。対馬の北部ではモミの混入が多くなる。

竜良山原始林

厳原町の南部にあり、大正十二年に国の天然記念物に指定されている。対馬を代表する原始林である。この原始林は、典型的な暖帯林であり、昔の対馬の植生をそのままにとどめている。林床には、対馬の他の地域では見るこ

とのできない、ヒメトケンラン、ヤクシマネッタイラン、ガンゼキラン、ミヤマトベラなどのめずらしい植物が自生している。また、樹上には、ムギラン、マメズタラン、セッコク、フウラン、ナゴラン、クモラン、カシノキランなどの着生ランを見ることもできる。頂上付近の岩場では、チョウセンヤマツツジの自生もある。なお、ヤクシマネッタイランの分布は竜良山が日本の北限となる。

竜良山原始林は、県内の原始林のなかでも規模が大きく、貴重な原始林の1つであり、四季を通じて精査すれば、未記録の植物も発見できるのではないかと思う。

最近の野草ブームはこの原始林までおよび、貴重な植物が次々に姿を消しつつあることは憂慮にたえない。

洲藻白岳原始林

白岳は上部が石英斑岩からなる美しい山である。日鮮混交林としても有名であり、原始林の上部は多くの大陸系の植物が自生している。チョウセンヤマツツジの主産地も上部の岩場であり、5月上旬の開花期は岩場がこの花にかざられる。

ここでは大陸系の植物であるチョウセンヤマツツジ、カワムラサキツツジ、ゲンカイツツジ、アベマキ、フシノハアワブキ、イワシデ、ニグルミ、コバノチョウセンエノキ、ツシマママコナ、日本系植物のモミ、ヒメコマツ、コハウチワカエデ、ソヨゴ、ナツツバキ、ミヤマシキミ、イモノキ、カナクギノキ、カクレミノ、コバノミツバツツジ、ツシママンネングサが混生している。対馬の固有種であるシマトウヒレンの原産地でもある。原始林内は着生ランも多く、ベニカヤラン、セッコク、カヤラン、ムギラン、マメズタラン、

クモラン、フウラン、ヨウラクランなども自生している。

御岳原始林

御岳は標高490mの、対馬北部では一番高い山である。この原始林は他の原始林と比べるとモミの混じる割合が大きく、大木になっているものも多い。アカガシ、アラカシ、スダジイ、カゴノキなどの常緑広葉樹が主木で、これにコハウチワカエデ、イタヤカエデ、ユクノキなどの落葉広葉樹が混じる。林床にはナンザンスミレ、ウスバサイシン、ベニシユスランなどが生え、樹上にはセッコク、カヤラン、ベニカヤラン、ヨウラクランなどのラン科植物、ノキシノブ、カタヒバ、シノブなどのシダ植物が着生する。

分布上興味のある種

チョウセンヤマツツジ (ツツジ科)

とくに白岳の自生地が有名であるが、最近の調査で、厳原町の立亀岩、竜良山山頂、仁田川流域でも発見され、とびとびではあるが全島に分布していることが分かっている。半落葉性で低く横に広がっていく性質をもっている。4月中旬から5月上旬にかけて直径5～6cmの淡紅紫色の花をつける。白岳頂上のもとの、仁田川流域ものもとは花型、開化期に若干の差がある。最近乱獲のはげしい植物の1つである。

ゲンカイツツジ (ツツジ科)

本種は岡山県以西、九州北部、対馬、朝鮮半島、中国まで分布する。対馬では北部にいくほど多く、南部ほど少なくなる。3月中旬からコナラ林など落葉広葉樹林内、山林の露出した岩、浅海湾内の波打ち際まで群落をつくり、対馬の初春はゲンカイツツジの桃紫色の花にかざられる。花の色は変異も多

く、まれに白色も見られる。

ウラジロカンコノキ (トウダイグサ科)

対馬の南端豆殿の一部に自生地がある。対馬のカンコノキの自生は多いが、ウラジロカンコノキは岡部虎男氏によりかなり調べられたが、豆殿以外では発見されていない。カンコノキは無毛であるのに対し、ウラジロカンコノキは葉の裏と若い枝に毛があることで区別できる。発葉もたいへんおそく5月になる。長崎県内では、外山三郎氏が、五島、島原半島で発見している。

モクゲンジ (ムクロジ科)

外山三郎氏が昭和48年に、豊玉町妙見の元島神社で野生のものを発見したのが対馬での初記録であり、最近、島内数か所でも発見されている。落葉高木で、中国、朝鮮半島から日本まで分布する大陸系の植物であり、7月に黄色の花をつける。別名センダンバボダイジュとよばれ、神社や庭園に植えられる。

ダンギク (クマツツラ科)

ダンギクは台湾、中国、朝鮮半島、日本では対馬、壱岐、五島、平戸、長崎を中心とする九州西北部に分布するが、とくに対馬に多く、国道ぞいの崖地や、山の露出した岩の上に群生しているのを見ることができる。紫色の段上に咲く花は美しく、対馬の名花である。

オオチダケサシ (ユキノシタ科)

オオチダケサシは、ヒマラヤ、中国、朝鮮半島、アムール、ウスリーから対馬まで分布する大陸系の植物である。対馬での自生地は限られ、上県町の一部、竜良山の上部のみである。上県町の自生地では、川岸の露出した岩の上に生えており、川が増水するとかぶるようなところである。7月下旬から8月上旬にかけ淡紫紅色の花をつける。

オウゴンオニユリ (ユリ科)

日本本土に生えるオニユリは、そのほとんどが3倍体であり種子ができない。対馬に自生するオニユリは約75%が2倍体のオニユリで、大部分が種子をつける。日本本土ではオニユリの変異を見ることはできないが、対馬では種子繁殖をしており変異も見られる。その代表がオウゴンオニユリであろう。オウゴンオニユリは黄色のオニユリで、花つき繁殖とも大変よい。

ツシマラン (ラン科)

ツシマランは昭和51年に厳原町で発見されたもので、現在、日本での分布は対馬の発見地のみである。落葉体をもっておらず、全体が赤褐色の腐生ランであり、10月上旬に3~10個の特徴のある花をつける。世界での分布は、ベトナム、タイ、中国である。毎年地表に姿をあらわさないために、詳しい生態は分かっていない。

おわりに

対馬は日本と大陸の中間に位置し、植物のみならず生物全般にわたって、その分布に興味のある島である。これまでに多くの研究者によって生物相があきらかにされてきたが、まだ調査研究の余地は十分ある。それだけに今後の課題も大きく楽しみである。

(今里中学校)

対馬の鳥

たにくちひでき
谷口秀樹

毎年ゴールデンウィークの頃になると、上県町佐護の平野には300人ほどの人たちが訪れます。この現象は、10年ほど前から起きようになったものです。この人たちの出で立ちみんな一様に似ています。普通首から双眼鏡を下げ、肩には三脚につけた望遠鏡をかついでいます。そして、人が普段は入り込まないような所を歩いたり、車を入り込ませたりしています。時には、そこらの中の人々が1か所に集まって、1点をじっと見つめていることもあります。

一体この人たちは、どこから、何をしに佐護に来ているのでしょうか。

この人たちの乗っている車のナンバーを見ていると、様々な地域から来ていることが分かります。福岡ナンバーが多いのですが、遠くは練馬、山形ナンバーも見えます。そして、この人たちの見ている方向には決まって小さな生き物（時には大きな場合もありますが）、鳥がいます。この人たちの目当ては鳥だったのです。

でも鳥なんてどこにでもいる生き物です。なぜわざわざ対馬までやってくるのでしょうか。それは、この人たちが来るようになった十数年前に答えがあります。

十数年前のことです。日本野鳥の会の発行する機関紙「野鳥」に、対馬の鳥を紹介する記事が載っていました。その記事の中には、今までに日本ではあまり見ることはできなかったシマノジコのような鳥や、日本で初めての記録になるマダラチュウヒが書かれていたのです。この記事を読んだ人たちが

どっと対馬を訪れるようになったという訳なのです。その数は年を追うごとに増え続け、対馬は日本中に知れ渡るバードウォッチングのメッカになったのです。

ところで上県町佐護にだけバードウォッチャーが集まるのも訳があります。それは、季節と対馬の南北に長い地形が関係しています。鳥は、季節によってすむ地域を変えるものがあります。それを「渡り鳥」と呼んでいます。そして渡り鳥は、南北に移動することが多いのです。それは、寒さによる餌の増減に合わせて起きていると言われていています。すなわち、冬季の餌の減少により、鳥は、暖かくて餌の豊富な南方をめざし、夏季、温度の上昇による餌の増加により、競争相手の少ない北方をめざすのです。

渡りは地形によりそのコースが限定されてきます。山岳や海は避けて飛ぶと言われていています。しかし、日本のように四方を海で囲まれた国では、どうしても海を渡らなければなりません。そこで、半島や島が渡りの中継基地になるということです。対馬の場合は、朝鮮半島と九州の間に位置しているので、ちょうど休息地として便利です。そこで、春北上する渡り鳥は、南部に到着すると次第に上島に渡り、ちょうど韓国と相對する、上県町佐護に集中することになります。佐護は水田地帯ですので、平地に生息する鳥たちの貴重な休息地ともなります。

秋の渡りは、春ほど顕著に現れず、バードウォッチャーもほとんど見られません。私の見た限りでも、あまり特筆するものは見られません。秋は南下するわけですから、下島に多く見られるかと思って南部の地域も調査したことがあります。やはりあまり見られませんでした。対馬が、より朝鮮半島に近いからではないかと思われます。つまり、南下するときには休息する間もなく一気に九州方面に渡って行っているものと思われます。

そんなことから、秋は春の時のようなバードウォッチャーの訪れはありませんが、春には見られない味わいもあります。

その1つが、アカハラダカの渡りです。アカハラダカは中国東北部や朝鮮半島で繁殖する小型の鷹です。この鷹は、数年前まで日本ではごく前に観察されるだけの珍しい種類といわれていました。ところが、数年前の秋に琉球列島を南下する群が観察され、その後、次々に各地で報告されるようになってきました。1986年の9月12日から13日にかけて男女群島女島で1200羽の群が観察されました。ところが翌14日、五家原岳において13000羽の群が観察されて、長崎県内のアカハラダカの渡りが解明されてきました。翌年には、県北でも数千羽の渡りの群が観察され、さらに北にある対馬での渡りが期待されていました。そして、ついに巖原町にある内山峠においてアカハラダカの800羽の群が観察されたのです。

当日観察された國分先生の話では、霧の中から次々に現れて壮観だったそうです。その後、10000羽を越える群れも観察され、対馬もアカハラダカの主要な渡りルートになっていることが明らかにされました。

バードウォッチングをしてくると、それぞれ好きな鳥が決まってきますが、鷹が好きな人が多いようです。特に鷹類の渡りを観察すると、その姿に圧倒され、次第にその時期になると落ち着かなくなる人が多いようです。その人達は鷹熱にかかってしまったのです。実は、私もその一人ですが、9月下旬になると私の内山通いが始まります。普通は早起きが苦手な私も、この時ばかりは、夜明け前には現地にいるという技を使います。

鷹の渡りで最近明らかにありつつあることがあります。

ハチクマという鷹は最近西に渡っていくということが明らかにされました。本州を西に向かうルートが広島県の研究者によって解明され、その後福岡県

